

保健師は、保健師と看護師両国家試験に合格した人たち。法改正で保健師の保健指導業務が男性にも認められて今年、四半世紀を迎えた。「男性保健師」は11月、節目の全国集會を県内で開く。厚生労働省統計によると2016年末現在、その数は10年前より約3倍の全国1137人まで増えたが、全体では2.2%と依然少数派。県内自治体では18年度、市町に24人、県に4人が就業している。奮闘する姿を取材した。(加藤愛己)

もっと元気な街へ 男性保健師 県内で奮闘

県西部健康福祉センター 浜名分行舎 宮地俊行さん



数々の被災地で災害支援の経験を重ねてきた宮地俊行さん＝湖西市の県西部健康福祉センター浜名分行舎

県西部健康福祉センター浜名分行舎の宮地俊行さん(42)は2002年度に県に採用された2人目の男性保健師だ。地域医療課で難病対策や結核など感染症対策を担い、患者からの相談や医療費助成の手続きなどに取り組む一方、災害発生時には住民の健康支援のため被災地に派遣され、経験を重ねている。

赴いたのは04年の新潟県中越地震、11年の東日本大震災、12年の九州北部豪雨、鬼怒川堤防が決壊した15年の関東・東北豪雨。大震災は、11年4月29日～5月3日と6月1～5日、翌年1月23日～2月3日の計3回、岩手県山田町で活動した。

複数の避難所を巡回し、健康相談やエコノミークラス症候群の予防活動、仮設トイレの消毒、受診を要する住民の巡回医療チームへの橋渡しなどに従事。住民に声を掛けると、高齢者は「みんな大変だから」と我慢し、不調を口にしない。血圧測定をして初めて、血圧が高く、薬がないことを明かしてくれた。「表面上

災害支援経験重ね

のやりとりで判断してはいけない」と教訓にしている。一方、津波で家族の手を離れてしまうなど住民の壮絶な体験談を傾聴して無力感にさいなまれ、自身の精神状態を平静に保つことの難しさも感じている。

被災地支援で経験を重ねる

関係する人たちにすぐに名前を覚えてもらえるのはメリット。住民は男女同数。保健師も男女バランスよくいると良いかなと思う。

牧之原市 篠原佑太さん

牧之原市の保健師篠原佑太さん(23)は2017年春に市に採用され、健康推進課母子健康係で乳幼児健診などを担当している。健診では身長、体重、頭囲、胸囲など計測後、篠原さんが保護者と面談して子育てや子どもの心身の発達、保護者自身に関する悩みの相談を受け、必要な時は支援機関を紹介する。

もともとは看護師志望。母が臨床検査技師のため医療職は身近だった。進学した聖隷クリストファー大で男性保健師の話聞く機会があり、保健師に関心を抱き始める。決定打となったのは病院での看護実習。生活習慣病の患者に接し、「元を絶つ」との大切さを心に刻んだという。

働き始めて2年目。専門職として保護者に向き合うが、自身に子育て経験はない。「この助言が、この子に、このお母さんに本当に合っているか」。日々悩み、葛藤もしている。ある母親に「夜泣きがひどく、つらい」と相談され、「お母さんは頑

子育てに寄り添う

子育てに寄り添う

母子健康係で男性は1人。皆さん温かく接してくれる。子育てに関わる父親は増えてきたが、現実には母親が主体。お母さんに寄り添い、必要とされた時に男性の視点を生かしたい。

張っている」と応じた。数カ月後、「夜泣きが収まった。話を聞いてもらえてうれしかった」と声を掛けられた。子の自然な発達か、助言の効果かは不明だが、自らが目標とする「住民の心の声に寄り添う」ことが少しできたかもしれない、と喜びを感じている。

つながりを意識し、強い地域づくりを目指す伊藤貴規さん＝磐田市役所



磐田市 伊藤貴規さん

磐田市の保健師伊藤貴規さん(34)は2008年春に採用された。地域づくり応援課で市内305の自治会を担当し、少子高齢化が加速する中、多岐にわたる活動を支援している。

大学卒業後、聖隷三方原病院で救命救急センターの看護師として勤務していた。心疾患や脳血管疾患で運ばれてきた患者を目の当たりにして、「倒れる前に地域でできることがある」と1次予防の重要性を痛感。08年、保健師に「転身」した。

最初の市立総合病院では特定健診の開始と月に1度の市民対象の健康教室を担当。教室参加者はそれまで10人程度だったが、関係施設を駆け

特定健診で保健指導のため

自宅訪問した男性から性的悩みを打ち明けられたことがある。同性だからこそ話してくれるというケースはあり、期待に応えたい。

新たな地域像描く

回って広報に努め、100人近くまで増やすことに成功した。「動けば動くほど人は動いてくれる」と知った。前任部署は市の魅力を外にアピールする「シティプロモーション」。市を、そして、将来を担う若者を盛り上げてきた。

保健師は「人と人をつなげる仕事」。今はどうすれば地域が円滑にまわるのか勉強中でもある。住民のニーズを把握し、つながりをつくり、「地域に一人でも多く『達者な人』を増やす」ことが目標だ。